

今号の内容	ページ
◆風水害に備えよう	2～9
◆春の褒章・叙勲ほか	10～11
◆今から熱中症対策をほか	12
◆火の取り扱いには十分注意ほか	13
◆市民のひろば(14-15) ◆川柳(15) ◆図書館・水の郷ニュース、柳川百選まち歩き(16-17) ◆情報わいど(18-23) ◆がんばったね・ぬくもり(23-24) ◆もちふみデビュー(24-25) ◆保健ガイド(26-27) ◆新市史抄片(28)	



運動会で笑顔はじける

矢ヶ部校区公民館運動会が5月12日、矢ヶ部小学校運動場で開催されました。大人が出場した地区対抗障害物リレーでは、ハードルを越えたり、つり下げたお菓子の袋を口でくわえたりして、笑顔で競技を楽しみました。

柳川ゆかりの二人の洋画家、龍駿介と石橋美三郎

柳川市史編さん事業によって、これまで忘れられていた柳川ゆかりの美術家の存在が明らかになった例が少なくありません。ここでは、龍駿介と石橋美三郎という二人の洋画家を紹介しします。

龍駿介（1889～没年不詳）は、明治22年、柳河町に生まれました。生地については高田町との情報もあり、今後検討の余地があります。龍清六が元の名前。上京し、遠山五郎、山本森之助、南薫造に師事し、川端画学校にも学びました。昭和初年ごろに光風会展や白日会展に入選。昭和6（1931）年に柳川の伝習館講堂と柳河高等学校講堂において



龍駿介「富士山」
1944年、油彩・カンヴァス、65.5cm×91.0cm（30号P）、個人蔵（柳川古文書館寄託）



石橋美三郎「柳川風景」
昭和初期、油彩・カンヴァス、45.7cm×53.2cm（10号F）、個人蔵

個展を開催しています。昭和7年から8年春にかけて熊本県天草に滞在、同9年には満州に渡り、それぞれの地の風景画を多数制作したようです。昭和10年3月ごろ、龍清六を龍駿介と改名。昭和13年には実業家、渋谷正吉の依頼により、ドイツ国総統、イタリア国首相、満州国皇帝に献上する富士山図を依頼され制作し注目されます。同年より富士山を専門的に描くようになり、徳富蘇峰らの後援による「富士洋画展」をたびたび開催しました。戦後も富士山図の制作を続け、たびたび富士油絵展を開催しました。昭和55年ごろには東京都練馬区東大泉町に住んでいたよう

ですが、没年も含めてその後の履歴は不明です。

石橋美三郎（1893～1968）は、明治26年、瀬高町下庄に生まれました。福岡県立中学伝習館を中途退学し、明治41（1908）年上京、太平洋美術研究所に学びました。

大正後期から太平洋画会展を本拠とし、一方で並行して二科会展をも発表の場としました。太平洋画会では昭和8（1933）年に会員に推挙され、同会の幹部となっています。その後も同展を発表の場としましたが、昭和12年からは石井柏亭、有島生馬、安井曾太郎らの発起になる一水会展に参加しました。昭和6年ごろから10年代にかけて、柳川を含む九州各地での個展を毎年のように開催しています。後には示現会展にも参加。昭和43年死去。立花家史料館に石橋美三郎が描いた肖像画が残る他、福岡県立美術館、みやま市立図書館などに遺作があります。

二人についてはいまだ不明な部分も多く、情報や作品を持っている人はお知らせください。

市史専門研究員

植野健造

編集後記

●吉川静子さんという人をご存じですか。スイス在住で世界的に活躍されている芸術家です。疎開で神戸から柳川にやって来て、城内小から伝習館を卒業。祖父が柳川高校の創設者、大沢三入氏とのこと。吉川さんから、柳川のことが懐かしくなったと、市へメールを頂きました。（英二）

●全国広報コンクールの組み写真の部で、水害の状況をお知らせした昨年の8月1日号67ページが入選。実は一枚写真の部で6月15日号の表紙も県を代表し出品された。こちらは入賞を逃したが、これも取材にご理解いただいた皆さんのおかげ。これからもよろしくお願いします。（賢治）



平成25年4月末現在

人のうごき

- 人口 70,675人（前月比9）
 - 男 33,450人（-6）
 - 女 37,225人（15）
- 出生 49人、死亡 73人
- 転入 289人、転出 256人
- 世帯数 24,900世帯（54）